

## 山形で、元気よく生きる力としての企画教育を考える

山下 英一 | Eiichi YAMASHITA

### 1. 基本的心がまえ

企画構想学科は、人の幸せのために企画力を身につけることを教育の目的としている。人の幸せを考えることは、「幸せて何だろう」と、あらためて人のあたりまえの生活・暮らしの豊かさに思いをめぐらすということである。しかし、だからといってそれがそのままよい企画を考えることにつながるわけではない。

なぜなら、人のライフスタイル・生き方に本気で働きかけようとするならば、人に対する敬意、社会に対する見識が問われ、何より働きかける自分自身のライフスタイル・生き方が同時に問われてくるからである。ここに方法論を超えた学科の教育的本質がある。

大量生産・大量販売・大量消費・大量廃棄を中心とする産業社会は、いわば、人々は欲望を刺激されれば消費を無限に繰り返す存在であることを前提としている。しかし、このような都合のよい消費者像は通用しなくなり、企画者である情報の送り手自身が、どんな幸せの、生き方のヴィジョンを持っているのか、そこに共感がなければ人は動かない時代がきている。

### 2. 生きる力としての企画教育

20世紀を席卷した産業社会は、より良いものをより多くを基本原理とする産業化を無限に発展するかのように進めた。同じく学校教育も、全国どこでも同じカリキュラムで、人の類型化を押し進めたという点で産業社会と呼応している。

この産業化は、市場を活性化させ人々の感覚を高度に

拡張する豊かな消費世界(商品世界)を登場させた。しかし、並行して巨大化する制度への依存度も高まり、規則に従えば生活できるというような他律的な人間を作りだし、一人ひとりの生きるパワーを失わせてもいる。教育されればされるほど自分で学ぶ力が弱まるのが問題とされている学校教育がよい例である。

現代、人の幸せが至る所で問われているのは、生きることがそのまま喜びであるような、人と人が共に元気よく生きていく「あたりまえの暮らしがなぜこんなに難しいのだろう」と皆が思っているからである。

生産のために消費する、消費のために生産するというシステムが、人の幸せにつながらないことがはっきりしてきた。一人ひとりの身体性の場所から、つまり日常生活の小さな出来事から、元気よく生きるという自律性の回復に向かって、考え方・ものの見方や使い方を変えていくことが重要になってきている。何が起こるかわからない日常の様々な出来事に適切に対応する、生きる力としての企画教育が求められている。

### 3. よい出会いこそ宝である

以上、基本的心がまえと、生きる力としての企画教育について述べたが、では具体的な場所(そこに暮らす人々)に実際に働きかける企画教育を考えるときの大切な鍵となるものは何だろうか。

それは企画する学生たちの真の“共感”である。

先生から出された課題だからと疑問なく企画に取り組むのであれば、たとえ協力してくれたとしても、そこに暮らす

人々の信頼を得ることはできない。当然だが、人々の暮らす場所は外部者の素材ではない。しかし、きっかけは様々だとしても、人とのよい出会いに宝のような共感があれば、形のあるなしに関わらず必ずよいコトが生まれると信じていることができる。人から大切な宝を受け取った・託されたとする自分(自分たち)の共感こそ、人の幸せのために企画を考える動機の源である。

そして、「正しいだけでは人は参加しない。楽しいだけでは他の人に関係ない」という「正しさ」と「楽しさ」の相容れなさを、何とかして楽しく乗り越える飛躍力が、企画に求められることになる。

#### 4. 山形の「場所」「農」「食」をキーワードとして

次のページに紹介する実践事例[資料1参照]は、特に、山形の「場所」「農」「食」をキーワードに展開している企画プロジェクトの一つである。これは、その場所に暮らす一人ひとりが何を大切に生きているのか、その気持ちの宝を集め、〈宝を聞く・共感する・伝える〉を基本として、人の幸せのためのデザインを考える「やまがた宝さがし」活動の歩みから生まれたものである。

具体的には、2014年度前期、山形県高畠市で優れた有機野菜をつくっている「(株)おきたま興農舎」と東北の優れた農産物を販売する「ブルーファーム(株)」から、有機野菜をもっと若い人に食べてもらうにはどうしたらよいのかとの企画依頼があり、企画構想学科3年山下ゼミが取り組んだ。

そして、美味しく体に安全な野菜を手間ひまかけてつくっている生産者の想いを「宝」であると共感した学生たちが、試食会「ほくを食べてみる会?~野菜で作ろう子供の未来~」を企画し開催する運びとなった。

子供たちとお母さんたちに、「野菜のほんとうの美味しさ」と「野菜を選ぶことの大切さ」を伝えるために、有機野菜を中心とした野菜との楽しくおいしい出会いを目的とした試食会である。

特に「消費者が生きてするために必要なものを作る現場が農業だ」との生産者の熱い話に感銘を受けたことから、消

費者・生活者でもある学生たちの中で、自分の問題でもありとして企画を考える動機が確かなものとなった。

この授業プロセスの詳細は添付[資料3参照]したが、まず現場に“からだ”を運び、人との出会いを大切にしてく話を聞く。そして共感した自分の“こころ”を大切に仲間とよく話し合い、何が本当の問題なのか? 誰のための企画なのか? 何を本当に伝えたいのか? 等を“あたま”でよく考える。このような順番を大事にした。後から振り返れば目的に向かって1本道のように見えるが、実際はいろいろな人との出会いを頼りに、どうしたらよいのか具体的な企画のゴールをさがして暗中模索の4ヶ月であった。

現代社会は、誰でも反射神経的にまず先に“あたま”が動いてしまいがちだが、それではよい企画を考えることはできない。学生たちが、経験したことがない出来事やつねに変化する状況・関係の中で、想像力を発揮して、どうしたら人を笑顔にできるのかを楽しく全身で考える、このような「考える主体を自分で育てる」ことこそ、生きる力としての企画教育が目指すことであり、本質的な意味でのデザイン教育だと考える。

尚、この小さな試食会が子供とお母さんから大変好評であったことから、やまがた有機農業推進コンソーシアムから有機栽培米普及に関する企画依頼が来ていることを付け加えたい。

#### 5. 企画の趣旨文

最後に、この試食会会場で、学生たちが勇気を持って宣言した企画の趣旨文を紹介する。

「いつも台所に立っているお母さん、そして初めて食べ物を口にしてから日の浅い子供たちに伝えたいことがあります。私たち三年生は子供から大人に変わったばかりで、それでも無邪気にはしゃいで遊んだ記憶は、忘れかけた昔のものですし、日常の中で知らないことに出会うことはあっても、視界がきらきらするほど感動することは少なくなっていました。

でも、実は子供たちはすべてを体で知っていて、大人に

なるということは知っていたことを思い出していくことなのかもしれません。

わたしたちはゼミの活動を通して、山形の自然と職人が生み出す恩恵に出会いました。消費者に真剣に向き合って野菜作りをする方の話を聴いたり、田植え体験をしたり、そこで『思い出した』のは、食べ物は体にとって本当に大切なものであるということです。

このイベントには、子供たちに野菜を好きになってもらいたいというわたしたちの願いが込められています。農業や食品添加物など、不健康な食物が問題視されている今、健康な食物を食べ、健康に生きるという“あたりまえなこと”にわたしたちも向き合い、議論を重ね準備をしてきました。

旬を迎える作物は、体を元気にする助けになってくれます！

今日は、嫌われもののピーマンが活躍する絵本[資料2参照]からスタートします。緑色で、にがーい彼の声に少しだけ耳を傾けてみませんか。]

2014.7.29「ぼくを食べてみる会?～野菜で作ろう子供の未来～」趣旨文より

[執筆者]

山下 英一

Eiichi YAMASHITA

企画構想学科

Department of project Design, School of Design

教授

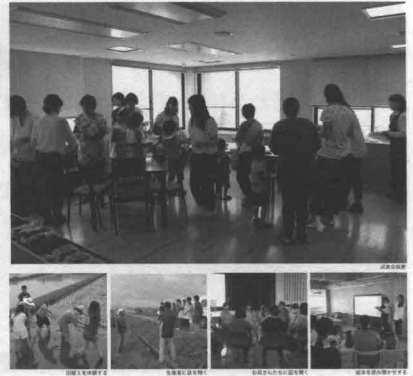
Professor

有機野菜及び野菜と子供たちとのおいしい出会いを目的とする試食会の企画・開催 概要

ぼくを食べてみる会?  
～野菜で作ろう子供の未来～  
企画開催

●有機野菜を若い人に食べてもらいたい。山形県高崎市で有機野菜をつつている「おきたま農園」と「ブルーファーム」から、有機野菜を若い人にもっと食べてもらうにはどうしたらよいかとの企画依頼があり、3年山下ゼミが取り組む。

●子供たちとお母さんたちに、おいしく安全な野菜を手間ひまかけてつくっている生産者の想いを宝であると共感したゼミ生たちが、子供たちとお母さんたちに、「野菜の本当のおいしさ」と「野菜を選ぶことの大切さ」を伝えるために、有機野菜及び野菜とのおいしい出会いを目的とする試食会「ぼくを食べてみる会?～野菜で作ろう子供の未来～」の企画開催。



[資料1]

絵本「たかしとピーマンの大冒険」の企画・制作と読み聞かせ



[資料2]

●企画プロセス (有機野菜及び野菜と子供たちとのおいしい出会いを目的とする試食会「ぼくを食べてみる会?～野菜で作ろう子供の未来～」の企画・開催)

- 1) オリエンテーション・有機野菜の生産者に話を聞く+有機野菜試食  
・農産物に出かけ、おきたま農園の小村会長から有機野菜の本質と、ブルーファーム代々の早さんからの依頼内容について話を聞く。 生産者(農家)の現状を知る(図6)  
・有機野菜の試食と農場見学。 現場で学ぶ。
- 2) 無農薬野菜の生産者/関係者に話を聞く+田植え体験  
・朝日新聞に出かけ「無農薬野菜」の企画編集。おきたま農園から無農薬野菜について話を聞く。 現場で学ぶ。
- 3) 生産者の想い(=旨)に対する共感を大事にしながら話し合いを重ねる  
・生産者の家にどうお礼したかや畑の様子などから、お礼の気持ちに共感する。 生産者の想いを知る(図7)  
・有機野菜について勉強し、おいしい安全な野菜をつくりたいとする生産者の想いに共感する。 生産者の想いを知る(図7)  
・このお礼を大切に生きていくための野菜の大切さを伝える。 畑に何をしようかという話し合いを重ねる。
- 4) こども芸人の先生に話を聞く  
・こども芸人大学の津田先生に、お母さんが子育てにあたり野菜を食べさせることをどう考えているのかについて話を聞く。
- 5) 話し合いを重ねる(企画案を検討する)  
・お母さんと子供たちに有機野菜を知るためにはどうしたらいいのかを中心に議論を重ねる。  
・結果、まず購入先として、子供たちと野菜の楽しい出会いを目的とする試食会を開催すべきではないかと考える。
- 6) 販売者でもある野菜ソムリエの方に話を聞く  
・山形市の野菜ソムリエの山口さんから、山形の野菜の産地状況及び野菜の試食会に関する具体的なアドバイスももらう。 販路の確保、調理について聞く(図8)
- 7) 小さい子供のお母さんたちに話を聞く+子供たちにアンケート+検討する  
・40名のお母さんたちに産地での野菜消費状況及び有機野菜について聞く。子供たちには楽しい野菜等のアンケートをとる。結果を検討する。
- 8) 保健所で試食会・調理に関わる注意点を教わる  
・試食会開催が社会的活動であることと教育する。
- 9) 最終検討・確認&企画書作成+関係者に協力を求めて進行説明  
・コンセプト「子供とお母さんが野菜の美味しさを出ようまっかっぐり」及びタイトル決定。関係者に協力を得る。 協力者の依頼を説明する。
- 10) 具体的検討準備  
・関係者への連絡とポスター作成/野菜購入/調理/商品購入/読み聞かせ用絵本制作/プレゼン作成/会場確保など。
- 11) 「ぼくを食べてみる会?～野菜で作ろう子供の未来～」7/29開催  
・有機野菜及び野菜と子供たちが出会う最初の現場。準備がはかばかしく進む(図9)
- 12) この体験を認識に変えるために言葉にする+報告書作成  
・この経験を振り返りて振り返ったか【実行日記】を各自のノートに書く。

[資料3]